様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３１１９１

研究課題名（和文）吹奏楽コンクールにおける下位成績スクールバンドの指導者育成とその方法の実験的研究

研究課題名（英文）Experimental study of leadership and how the lower grades school bands in the Band Competition

研究代表者
吉田　治人（YOSHIDA, Haruto）

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：７０４４９７７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：スクールバンドの現場において、指導法に問題及び悩みを抱える指導者は少なくない。本研究では、申請者が現場に赴き、実際に生徒達に指導するプロセスを指導者に観察してもらい、懇談を繰り返すことで、指導力を向上させることを試みた。1年目は申請者が提唱する「fWO(フォー)」という息の出し方の説明に主眼を置き、音質の統一に向けた指導、2年目には音程を合わせることに主眼を置いた指導、3年目には総合的な合奏力を養うことを主眼に置いた指導を行った。
成果としては、懇談及び指導中の指導者の発言から意識向上が見られ、吹奏楽コンクールの審査評価及び成績においても、ほとんどの団体が前年度と比較し、向上が見られた。

研究成果の概要（英文）：In the field of school band, leaders not a few with problems and troubles in teaching methods. In this study, the applicant has traveled to the site, it is actually asked to observe the leaders the led process to students, and by repeating the roundtable, tried to improve the leadership. First year by placing the focus on the description of the way out of breath that "fWO" the applicant has proposed, guidance toward the sound quality of unity, leadership is the second year that focuses on that to match the pitch , is in the third year was carried out guidance that was placed in the focus that you feed the overall ensemble force.
The outcome, seen awareness from leaders of the remarks in the round-table and guidance, even in the examination evaluation and performance of brass band contest, most of the organizations in comparison with the previous year, improvement was observed.

研究分野：トランペット演奏、指揮、吹奏楽指導

キーワード：吹奏楽指導　スクールバンド　吹奏楽指導者

１．研究開始当初の背景

(1)吹奏楽コンクールの地区予選、自治体予選の審査に立ち会うと、高水準の演奏をする団体(以下、上位ランクバンドと記す)がある一方で、下位成績にランク付けされる団体(以下、下位ランクバンドと記す)がある。下位ランクバンドに共通して見受けられる問題点として、主に管楽器の音が弱々しい、音質が「地声的」で硬い、音程が合わないこと等、管楽器演奏において最重要項目と言える「息の流し方」不具合に起因する（合奏以前の問題）が挙げられる。

(2)これらの問題については、吹奏楽コンクールの審査の講評記述においても該当団体に指摘して来ている。演奏上の問題は、一見、生徒達自身の演奏能力のみに原因があるように感じられるが、実は、そのほとんどが指導者の指導力不足に起因するところが多いと考えられる。指導者自身が、それらを改善する術を知らないので、生徒達は実質的な教育(指導)を受けていないことになる。その意味で、指導者の育成は極めて重要である。

(3)管楽器演奏において「息」が重要であるということは周知の事実ではあるが、これまでの指導メソード等では、「深いブレスを取る」「楽器にたっぷりと息を流し込む」等の、云わば、当たり前の事実説明がほとんどであった。例えば、「実際にはどのように息を流すのか」というような具体的な方法論は示されておらず、盲点になっていたと言える。

(4)研究代表者は、これまでに行ってきた、ポメラニアンフィルハーモニー管弦楽団(ポーランド)及び大阪フィルハーモニー交響楽団でのトランペット奏者としての活動、大阪音楽大学、神戸女学院大学での指導者としての活動、また、吹奏楽及びオーケストラの指導・指揮活動の経験を通して、管楽器奏法の中でも特に重要な「息の流し方」について、どの指導現場においても一定の効果が見られる方法に辿り着いた。

これらのことを元に、スクールバンドの指導者を育成(サポート)し、現場の演奏の質的向上を図る。

２．研究の目的

本研究の目的は、吹奏楽コンクールにおいて下位成績にランク付けされる中学校・高校団体(以下、下位ランクバンドと記す)の指導者育成を通し、結果的に生徒達の演奏技術・音楽性の向上を目指し、演奏の質的向上に結び付けることにある。

研究代表者は、コンクール審査・指導活動等の経験より、管楽器の「息の流し方」が、演奏に生じる様々な問題の最大原因、且つ共通課題であると認識した。その指導法に焦点を絞り、研究代表者独自の指導メソードを用いた生徒指導及び指導者への指導・解説を通して、指導者自身が実質的な管楽器指導ができるように導く。

３．研究の方法

(1)調査研究：研究代表者も審査に携わった、大阪府吹奏楽コンクール地区大会での下位成績団体にアンケート調査を行い、指導者の抱えている具体的な問題を分析し、実態を調査する。

(1)-1 現場での指導者と学習者の意識調査

研究代表者が審査した、平成 23 年度大阪府吹奏楽コンクール北摂地区大会での下位成績(銅賞)団体をピックアップし、アンケート調査を行う。

〔アンケート内容〕

・調査目的の説明
・指導者自身の問題意識に関する質問
・生徒達に感じている問題
・指導を受ける意志の有無等

(1)-2 各団体の実態調査

・各団体の現状が、いかなる過程を辿って現在に至っているか?
・この団体は、創部以来ずっとこの現状での活動を続けて来たのか？
・現在の状態でも、以前と比較すると良くなってきているのか？
・以前は良かったが、段々と悪化して来ているのか？
・もし、変動があったとすれば、異動人事による指導者(顧問)の交代との連動の有無は？

(1)-2 各団体の練習状況についての調査

・平日の活動時間と練習メニュー
・土日、祝祭日の活動頻度、時間、練習メニュー
・個人、パート、セクション、全体合奏の練習時間の割合

(2)実験研究：実際に現場に出向き、指導者と生徒に具体的な指導を実施する。初回時の演奏をビデオ撮影・録音に記録し、そのレベルを判定し、指導前の基準点とする。

〔指導の手順〕

①現時点の全体合奏演奏を聴く
②全体に「息の流し方」についてのレクチャーをする
③楽器パート毎に時間を取り、一人一人の吹奏状態を「診断」した後、レッスンを行う

この手順で、全パートを指導し、吹奏感の差異を感覚として身体に取り込ませる。

(3)分析研究：初回の演奏記録と指導後の演奏の比較・分析を行う。またコンクール結果及び審査講評を分析し、前年度との差異を検証する。

(4)指導者への指導

毎回、生徒への実技指導終了後に、フィードバックとして指導者への解説・質疑応答を行い、現段階で理解できたこと、できていないことを聞き取り調査する。必要に応じて直接、指導者への実技指導も行う。

４．研究成果

スクールバンドの現場において、指導法に問題及び悩みを抱える指導者は少なくない。

本研究では、研究代表者が現場に赴き、実際に生徒達に指導するプロセスを指導者に観察してもらい、懇談を繰り返すことで、指導力を向上させることを試みた。

(1)初年度

１年目は研究代表者が提唱する「fWO(フォー)」という息の出し方の説明に主眼を置き、音質の統一に向けた指導行った。一般に、管楽器吹奏に問題を抱える奏者の音は「地声的」な音であることが多く、その際の息は、無意識の内に、ロウソクを吹き消す時のような「フー（Ｆｕ）」という吹き方になっていることが多い。この吹き方での息は一点に集中し、口は時間の経過と共に窄まっていく。これに対し、研究代表者は「フォー(fWO)」という吹き方を推奨している。「フォー」と吹いた息は「フォー(fWO)」に含まれる「WO(ゥオー)」という発音をすることで口は「(O)オー」という発音をする際のように上下に広がり、息は拡散していく。これにより息の性質が「集中」から「拡散」に変わり、流れる息の量も増え、音質は柔らかく豊かなものに改善されるのである。これにより、現場の生徒からは「吹きやすくなった」「音が良くなった」等の感想が見られた。

指導者自身が、この感覚を体験することで、生徒への声掛けが可能になって来た。

(2)研究２年目

２年目には音程を合わせることに主眼を置いた指導をおこなった。管楽器は、ピアノや鍵盤楽器等の楽器自体が音程を持っている楽器とは異なる、いわゆる「作音楽器」であるため、奏者自身が音感を働かせて正しい音程を作らなければならない。このことが、楽器経験の浅いスクールバンドの生徒達の演奏の響きが濁る最大の要因である。まず、そのことを指導者及び生徒達に周知し、実際に音程が合った状態を体験させることで、美しくハモったハーモニーの響きの心地良さを味わわせることを行った。

長三和音を合わせる手法として、まず根音を低音で鳴らし、そこにオクターブ上の根音を鳴らす。この時点で音程が合えば、灘鳴らしていない筈の第５音が倍音で鳴り響き始める。その倍音を聴き取り、第５音をを加える。正しく音程のとれた第 5 音が加わることで、まだ鳴らしていない筈の第３音が倍音で聞こえてくる。それを聴き取り、第３音を加えることで美しい長三音が鳴り響くのであるが、演奏が上手く行っていない現場の指導者は、これらのことを認識していないことが少なくない。「生まれて初めて倍音が聴き取れた」と喜ぶ指導者もおり、基礎的な知識の周知の必要性を実感した。尚、この長三和音の第三音はチューニングメーターのゼロポイントの左側に示されている「－13.7 セントポイント」に合わすと良いとされている。このポイントは、平均律ではなく、純正律で取った第 3 音の適正ピッチを示すが、短三和音においてはゼロポイント右側に示されている「＋15.6 ポイント」に合わす。これらの事実も、演奏の響きに著しい濁りが生じているままになっている現場では、周知されていないことが多い。

基礎合奏として、ハーモニー構築に関する練習を導入している現場は多いが、「和声進行」を考えて取り組んでいることは少なかった。長三和音一つ一つの響きが改善されても、それをどのように楽曲合奏に結び付けていくのかの導きが無いと意味をなさないが、それを遂行するために、和声進行の説明を行った。ある一つの長三和音は、それだけでは調性を持たないが、それらが連なることで、トニック、サブドミナント、ドミナントとの性格を有する。この性格が認識できることによって和声進行の流れが感じられるのである。

これらのハーモニー構築に関する事柄は、上級生の方から意識が高まり、音程のズレ自体を認識することから、どちらに(高く・低く)ズレているかを認識する生徒の割合が増加して行った。しかしながら、単音や一つのハーモニーに関しては改善が見られるものの、楽曲合奏に臨んだ際には、まだ響きの濁りの解消には至らず、今後も更に継続的な指導の必要性を感じている。

(3)研究３年目

３年目には総合的な合奏力を養うことを主眼に置いた指導を行った。この項目においては、現場の指導者が、研究代表者の指導を実際に見学することで、その内容を把握してもらうことを主眼に行った。

実際に生徒の前で指導を行う前提に、指導者が楽曲を把握していることが大前提になる。楽曲の構造、調性、和声進行等々多岐に亘っての知識、それを基盤とした音楽的ニュアンスの感受が行われていないと、単なる「音への指導」になってしまう。指導者というのは、文字通り奏者を導かねばならないので、指導者が導くべきところである「演奏のゴール」的なイメージを持っていることが求められるのである。その次に、そのイメージ通りに演奏を導くための「指揮力」が問われることになる。希望者には指揮レッスンも行い、奏者にとって演奏しやすい指揮の追究も行った。

指導に臨むに当たっての最重要項目は、生徒の演奏を「聴き分ける力」を付けることである。タイミング、リズム、緩急記号や Agogik による揺れ等、現場で言うところの「縦の線」の不揃い、ユニゾンやハーモニーでのピッチのずれ、ミス音を聴き取れること、また楽曲における各声部間の適切な音量バランスを取ることも重要である。指導者自らの理想とする演奏に近付けるために、物理的な側面と感覚的な側面との両方からアプローチして生徒の演奏の質的向上を目指さなければならない。

その際に問われる指揮力の向上も目指さなければならない。指揮レッスンでは、指導者の指揮をビデオに収め、一緒に見て良くない点を見つけ、なぜ良くないのかを解説し、改善を図った。指揮を練習するという認識が芽生えてくることが認められ、指揮にもメリハリがつく等の変化が見られた。

(4)まとめ

3 年間の総合的な成果としては、まず、懇談及び指導中の指導者の発言から意識向上が窺え、指導者や生徒の感想文等からも、自分達が練習するにおいて何が重要か、が多少なりとも理解できていることが読み取れた。

また、吹奏楽コンクールの審査評価及び成績においても、銅賞→金賞(地区代表校も含む)、銅賞→銀賞、奨励賞→優秀賞等、多くの団体が前年度と比較し、向上が見られた。

反面、銅賞→銅賞と評価の変わらない団体も高校で１校見受けられた。この団体は、進学校で部活動を 2 年生一杯で引退するため、コンクールには 1・2 年生のみで出場する。初心者が数多く含まれるため、直接的な審査評価には繋がらなかったと考える。

今後、更にこのような形態の団体にも有効な手立てをも考えながら指導に当たりたいと考える。

尚、現在、この研究を通して得られた、息の流し方に関する指導へのアンケート回答データをベースにした、音質改善に関するテーマの論文を執筆中である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究代表者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1 件）

①音楽教育の一環としてのスクールバンド指導の在り方に関する考察（2015,信州大学教育学部研究論集　第 8 号,pp.109-127,吉田治人）

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　治人（YOSHIDA,Haruto）

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究代表者番号：70449776